



展示における昔を考える

青木 俊也 (COE教員 / 松戸市立博物館・学芸員)



1 「昔の暮らし探検<松戸版>」について

松戸市立博物館では今年7月21日から11月23日まで、子ども向けの企画展「昔の暮らし探検<松戸版>」を開催した。この展覧会は、小学校4年生の社会科の単元「きょうどにつたわるねがい」の一節「昔の暮らし」(『新しい社会3.4下』東京書籍)の内容に関連させたものである。教科書に載せられた昔の暮らしの道具の実物資料を展示することを基本コンセプトとして、平成9年度から、毎年変更を加えながら開催している。

今回、筆者が担当した「昔の暮らし探検<松戸版>」では、農家の生活資料を展示した「70年ぐらい前の農家の暮らし」と、戦後、使われ始めた家電製品や、ミシンやダイニングテーブルなどの洋風な生活を示す戦後生活資料を展示した「40年ぐらい前の暮らし」を対比的に配置して、いわゆる「昔の暮らし」から現在につながる生活の変化を表している。この展示構成によって「現在の私たちの生活がどのように形づくられてきたのか、戦後の生活のなかで失われていた様々な生活の知恵や技」を子どもにメッセージしている。そして、このメッセージを子どもが感じとれるために、実際に手に触れられるように、復元した生活資料や洗い張りなどの体験学習を組み込んでいる。

2 「昔の暮らし探検<松戸版>」の昔とは

さて、この「昔の暮らし探検<松戸版>」がどのような年代を想定して展示しているのかを、考えてみたい。教科書のなかの「昔の暮らし」の記述では、子どもたちが訪れた博物館の「昔の家をふく元してあるコーナー」で調べた「古い道具を使っていたころの人々の暮らし」とされる。そこには明確な年代の表記はないのだが、明らかに昭和初期をイメージできる農家の暮らしのイラストが付されている。今回の展示では近代社会のただ中にあり、戦争の影響が暮らしに表れ始めた「70年ぐらい前」という時期の農家の暮らしを、現在では失われてしまった生活の知恵や技があり、自然環境を利用していたとい

う特色のある暮らしのモデルとして提示している。その理由は、この展示が身近な生活の歴史を小学生の祖父母世代の人から聞き取れる時期として設定していることによる。70年ぐらい前という時期設定は、今後の年代の推移のなかで、アジア・太平洋戦争が本格化してくる時期である。そのような戦時色の影響があらわれている暮らしという状況を「昔の暮らし」のなかで考慮に入れるのかどうか判断に迫られよう。また、40年前ぐらいの暮らしは、子どもたちの父母世代の生まれた頃という意味付けをしているが、この趣旨の展示を始めた平成9年から数えた40年ぐらい前と、現在からでは8年もの年代差が生まれている。今後、40年ぐらい前という時期設定が昭和30年代から40年代へと推移していくことによって、自ずと展示資料の付け加え、変更も考えなければならないだろう。このような時期設定は、民俗学による聞き取り調査によるさかのぼれる時期が伝承者の世代交代によって推移していくのと同様に、推移しつづけることになる。「昔の暮らし」における昔という時期のあり方を考えていくことは、子ども向けの展示に限らず生活資料を展示するときの時期設定にも通じる基本的な問題といえる。これ以上考える紙幅はないが、今後、この趣旨の展示における「昔の暮らし」の時期設定は、戦時という状況をどのように扱うかを考慮しながらも、大枠としては戦前から戦後へとその比重を移していくことになると考えられる。

さて、今後の比重を増すであろう「40年ぐらい前の暮らし」で展示した戦後生活資料がどのように見られてきているのかという状況を少し整理してみたいと思う。

3 「昔の暮らし探検<松戸版>」の戦後生活

この展示の時期設定は、有効に生活の時代区分として働いていたと考えられる。展示を見学した松戸市内のある小学4年生の授業では、70年ぐらい前と40年ぐらい前の暮らしをそれぞれに分けて焦点を当てた授業を行って、そのなかでそれぞれの生活に関して、地域の古老に戦前

からの地域の変貌の話を、さらに小学4年生の父母に子ども頃の生活経験の話を聞いており、各時期の設定を生かした授業を展開している。その比較を通じて現在の自分たちの生活の良い面、悪い面を考えさせている。現在の生活をどのように考えるのかという子どもたちへ問いかけることは、この展示のメッセージと相通じているものであるが、このような使命を達成するには未だ展示の表現として不十分であり、自然環境の問題など今後課題を残している。少なくとも、現在の生活の問題にまで観覧者、子どもに意識させるためには、「昔の暮らし」の表現として、現在につながる戦後生活資料が必要であることは明らかである。この子ども向けの展示を始めた当初は、主に農家の手仕事に使われた生活資料によって構成していたのだが、平成12年度の展示から戦後の生活をテーマに加えつつ、戦後生活の変化を表現している。この戦後生活の変化を示す戦後生活資料は、いくつかの歴史系博物館で積極的に収集され集積されつつある。その基本的な位置付けとして、現代までの生活の変遷を表すためには不可欠なものとして認識されている。先の近代の文化遺産の保存と活用についての報告（平成8年7月8日）において「近代の我が国の国民の生活の理解に欠くことのできないもの」として近代の生活文化・技術の重要性が指摘されており、その特質である「科学技術の生活文化化」として家電製品などが評価されていることも相通じている。今回の展示も含めた各歴史系地域博物館による子ども向けの展覧会における戦後生活資料の展示も、同様の認識を持っていると理解できよう。

4 大人が見た「昔の暮らし探検<松戸版>」の戦後生活資料

さて、子ども向けであったこの展示が、その一方で様々な世代の人たちに見てもらうことも期待し、展示がそれぞれの生活の思い出を子どもたちに語り伝えてもらう場となることを意図していた。この思惑の通りに展示した資料にまつわる生活経験から、展示室において思い出を子どもたちに話しかける大人の光景はよくみられた。子どもの父母、祖父母などの様々な世代の人たちの多くが、この展示を懐かしいと感じとっていることは確かであった。特に展示室のおよそ4分の3を占め、農家の部屋をしつらえた「70年ぐらい前の農家の暮らし」に対して、簡略に展示台に資料を置いただけの「40年ぐらい前の暮らし」に対して足を止めている観覧者が多くみられたことは注意を引いた。特に小学生の親世代、30代から40代

ぐらいの人たちには、生活経験に直接結び付いた「40年ぐらい前の暮らし」により強く興味に向いているようにみられた。

この傾向は、平成14年度の同じ趣旨の展示であった学習資料展「道具と暮らし」における70年前の農家の生活と40年前の団地の生活を対比した展示の観覧者へのインタビュー調査でも表れている。「農家と団地の展示のどちらに「懐かしさ」を感じましたか？ その理由は？」と質問を試みたところ、半数の人が団地と答え、農家と答えた人は四分の一程であった。30代、40代の人の多くは団地と答え、自らの子供時代の生活経験に結びついた展示に懐かしむことを示している傾向を強く感じさせている。

もちろん、生活環境、年代の違いによって農家の暮らしを懐かしんだり、両方の暮らしを懐かしむ観覧者もいる。しかし、全体としては、共感できる懐かしさの対象が、戦前の農家の生活に対して、戦後の、特に40年前の生活に、少しずつ入れ替わっているかのようにみえる。

この戦後の生活への懐かしさは、使い古された家電製品の所蔵者の心地よい思い出とも通じている。例えば、初めて手に入れた電気釜を大切に取っておいた人にとって、このモノは自分の生活の大切な思い出の証であり、その思い出は戦後生活資料が示す急激な生活変化を肯定的にとらえた感性の表現と考えられる。「昔の暮らし探検<松戸版>」が、子どもたちに向けた「現在の私たちの生活がどのように形づくられてきたのか」というメッセージは、大人にとっては懐かしさの対象の変換を迫るほどの生活経験の変化を示すものなのだろう。もちろん、観覧者の発話がそのまま資料になるわけではないが、先の小学校で父母に「40年ぐらい前の暮らし」の様子を聞き取ったように、展示室でこの時代の生活を観覧者から直接聞き取っていくことも考えられる。展示を見る観覧者や戦後生活資料の所蔵者などによる懐かしさなどの感性を通じた戦後生活の記録の集積地になりうる可能性を博物館は持っている。

再生産された懐かしさともいうべき、昭和30年代ノスタルジアの流行が、かくも長続きしている理由には、この戦後生活への懐かしさが背景になっていると思われる。子どもに対して表現する「昔の暮らし」において戦後という近い過去を表現する博物館は、このような現状とどのように関係を持つことになるのか、戦後生活の記録から考えなければならない。